日本語教育における手習い歌の意義

蓮沼　啓介

1．王朝時代の手習い

宇津保物語。国譲の巻に手習いのやり方を説明する箇所がある。（ 資料１参照 ）。

（上略）あかきしきしにかきて、うの花につけたるは、かむな。はじめには、をとこでにもあらず、をんな手にもあらず、あめつちぞ、そのつぎにをとこで（云々）

手習いの始めは、をとこでつまり楷書体でもなく、をんな手つまり草書体でもなく、中間の書体である行書体に書いた阿女都千を習う。その次にをとこでつまり楷書体を習うとある。更にをんな手を習ってから片仮名と葦手を習う。葦手というのはあしで書きのことで「和歌ナド書クニ、文字ヲクヅシテ、葦ノ生ヒ亂レタル状ニ擬ヘテ書クコト。又水ノ流ル状ニ書クヲ水手トイフ」（言海）。葦手は平仮名の源流である。

ところであめつちとは何のことか。

2．あめつちとは何か

源順集にあめつちの歌がある。四十八首。始めの文字ないし末の文字を順に読むと「あめつちほしそら‥‥榎の枝を慣れ居て」の四十八文字となる。弟子である源為憲の口遊には「今案、世俗誦阿女都千保之曽。里女之訛説也」という評がある。クチズサミは天禄元(970)年の作である。訛とは怪しい言葉とか訛りのこと。田舎者の女が言い触らす怪説であると酷評している。どこが訛っているのか。アメツチホシソで切れてしまうところ。意味不明の誦なえ文句になっている。これはイロハニホヘトと同じことである。覚えるために棒暗記している。更に怪しくもある。どこが怪しいのか。まず定形性がない。二文字の言葉を重ねるばかりで、およそ詩歌としての体裁をなしていない。

天地星空　山川峯谷　雲霧室苔　人犬上末

漢字で書いても韻を踏んでいないから詩にはならない。更にゆわなどという田舎の言葉が使われている。極め付きは榎の枝をとエの文字が繰り返されているところ。同じ文字を使わない手習い詞であるはずなのに失敗に終わっている。

3．阿女都千の謎

(a) エが二度出てくるのは何故か

あめつちの歌には「得も言はで戀のみまさる心かな」「得も堰かで泪の川のはてはてや」同じア行の衣が繰り返されている。これは源順が既にア行の衣とヤ行の江を区別しない混用の世代に属していたからである。相模集あめつち十六首では「得こそ寝ね冬の夜深く寝覚めして」「枝寒み積れる雪の消えせぬは」と榎と枝が区別されている。相模は女流として鋭い語感を持っていて榎の枝をが別音を並べていることをさりげなく後世に伝えているのである。 延喜(901～)の頃に成れる新撰字鏡では明白に区別されているのに永観(983/4)に卒した源順の作った和名抄には混用が目立つ。(大矢透『音図及手習詞歌考』126頁参照)。

榎はア行の衣であるのに対して枝はヤ行の江であるから、同じ音が繰り返されているわけではない。

(b) なぜ以呂波ではなくてあめつちを習うのか。

（イ）大矢透。いろは歌はまだなかった。

大矢説の根拠。いろは歌は四十七文字からなる。ア行の衣とヤ行の江の区別が消失した後の時代の作品である。大矢説の前提。いろは歌は手習い歌であるから同じ文字を含まないし、抜けている文字もない筈である。とすれば四十七文字の時代の作品としか考えられない。

別の説も成り立つ。梵字に倣って四十七文字とした。悉曇では摩多という韻母が十二あり、體文という字母が三十五あるが、この合計である四十七文字に合わせて空海が四十七文字の仮名を定めた。一字余ることは分かっていたが、ア行とヤ行の区別は不完全であり、ア行の伊とヤ行の以には区別はないので、そのうちア行の衣とヤ行の江の区別も消失すると空海は予測していた。以呂波歌は諸行無常という仏法の真理を広める大人のための教えであり、子供の手習いのために作った歌ではない。手習いには阿女都千で十分である。

実は、大矢透の学説はその暗黙の前提が成り立たないので、崩壊の運命を免れないことになる。伴信友の説が基本的には正しいのである。

（ロ）伴信友。 紅葉はいろはの隠し言葉である。

まだ知らぬ 紅葉と惑う 疎ぶらし 千鳥の跡もとまらざりけり

紅葉は諸行無常を暗示するいろは歌の隠し言葉である。諸行無常をまだしらない子供に以呂波歌を習わせても、紅葉のこと？と戸惑うばかりで、厭わしいとも疎ましいとも感じるらしいことは確実である。これでは千鳥の足跡を連想させる文字が記憶に止まらなかったのも無理からぬところである。

なぜあめつちを習うのか。理由は明白である。以呂波歌よりも阿女都千の方が子供には向いているからである。

4．阿女都千の作者と成立年代の推定

作者は二人いる。前半と後半は構成の原則に違いがある。前半は漢字一字に仮名二字が対応している。これは振り仮名である。天地という漢語にアメツチと仮名を振っているわけである。ところが後半のゆわ猿から後は猿を除いて漢字に振った仮名ではない。残った文字を苦心して意味のある言葉に並べ換えたものである。

それでは前半の作者は誰か。吉備真備である。吉備真備が片仮名を作ったという伝承がある。片仮名とは何か。漢字の傍らに付す仮名であるから片仮名という。

到於天平勝寶年中右丞相吉備真備公取所通用于我邦假字･･･省偏旁點畫作片假名

明魏法師の倭片假字反切義解からの引用である。明魏は花山院流に属する藤原長親の僧名である。南朝の権大納言になっている。吉備大臣、倭片假字反切口決を引くが、その中に「也 以 宇 阿 反勇 尓」という一文が含まれている。これは父音が也行で母音が宇段であると子音は勇=ユとなるという説明であり、五十音図を前提にした説明であることは明白である。ユの原字が不明になり勇が代わりに持ち出されているわけである。

吉備真備は天平勝宝四(752)年に再び遣唐使として唐に渡っている。この時に中国人に

頼まれて漢字に片仮名を振って日本語を教えたと推算される。吉備真備が撰んだ原字とそれに基づき定めた片仮名を採って置こう。

阿女都千保之曽良　也末加八三祢多二　久毛幾利牟呂己介　比止伊奴宇辺須慧
アメツチホシソラ　ヤマカハミネタニ　クモキリムロコケ　ヒトイヌウヘスエ

更に息子の吉備泉が残った文字を用いて苦心して仕上げたと推計される。延暦十(791)年頃のことである。天地玄黄という千字文の出だしに触発されてゆわを思いついた可能性が高い。

ゟ和薩流　礼不世與　衣乃江乎　奈礼井天
ユワサル　オフセヨ　えノエヲ　ナレヰテ

後半の箇所が「里女之訛説」と酷評される部分である。

アメツチは片仮名であったという推定を補強する証拠を挙げておく。堤中納言物語、虫めずる姫君に次の様に見える。「仮名はまだ書き給はざりければ、片仮名に『チキリアラハヨキゴクラクニユキアハム』𛀁 とあり」とある。これはまず片仮名を習い、次いで仮名を習うのが普通であった当時の手習いのやり方を伝える描写である。手習いは阿女都千から始めたに違いない。とすれば阿女都千は片仮名で書かれていたに違いない。

阿女都千が行書体になった理由。ツの原字が川であるため。なぜ川をツと呼ぶのか、不明である。そこで都を崩して、つとした。

(ツについての補注)。ツの原字は川であるが、なぜ川が津の意味になるのか。これは誤訳の結末である。津は渡し場や船着き場のことであるが、倭国では津は川口にあることが多いので、これを川の意に取り違えた。川は倭国ではツと呼ぶという誤解に基づいて、ツという仮名が普及した。後に吉備真備がこの誤訳に気づいて、別字を探し、別という新しい原字を定めた。更に都をつとツに似せて書くことにした。つの原字は都合の都である。阿女都千も宇都保物語もつの原字を伝える名前である。

(止についての補注)。秦漢の古音に基づく。秦人が日本列島に伝来した古音である。

(乃についての補注)。助詞のノの意味に用いている。助詞のノが元々は漢語の乃の借用であるのかどうかはなお不明である。野と菜は大地とその産物であり、ノは元々源や付着を示す言葉なのかも知れない。物の名も物が源であり、名は物に付着した張り札である。

5．阿女都千の現代性

Heaven	Earth	Star	Sky	Mountain	River	Peak	Valley
アメ	ツチ	ホシ	ソラ	ヤマ	カハ	ミネ	タニ

以下省略。

資料 1

かゝるほどに、「右大將どのより」とて、て本四くわん、いろ〳〵のしきしにかきて、花のえだにつけて、そんわうのきみのもとに、御文してあり。

身づからもてまいるべきを、おほせごと侍し宮の御てほん、もてまいるとてなん。これは、わか宮の御れうにとの給はせしかば、ならはせ給ひつべくも侍らねど、めし侍しかばなんいそぎまいらする、ときこえさせ給へ。さて御わたくしには、なにのほか(ホカ)御えうある。

こゝには、よのためしになん。

とてたてまつれ給へり。御ぜんにもてまいりたり。み給へば、きばみたるしきしにかきて、やまぶきにつけたるはしのひて(マ)、はるのじ。あ

をきしきしにかきて、松につけたるはさうにてなつのじ。あかきしきしにかきて、うのはなにつけたるはかな。はじめにはおとこにてもあらず、をんなにてもあらず、あめつちぞ。そのつぎにをとこで、はなちがきにかきて、おなじもじをさま〴〵にかへきてかけり(き衍カ)。

わがゝきてはるにつたふるみづせきもすみかはりてやみえんとすらん　八二三

女でにて、

まだしらぬもみぢとまどふうとふうしちどりのあともとまらざりけり　八二四

さしつぎて(に)、

とぶとりにあとあるものとしらすれば雲ぢはふかくふみかよひけ(マ)

ん(こ)

つぎにかたかな、

いにしへもいまゆくさきもみち〳〵に思ひ心あるわするなよきみ　八二五

あしで、

そこきよくすむともみえで行水の袖にもめにもたゝずもある哉　八二六

と、いとおほきにかきて、ひとまきにしたり。み給て、「いとをしく、よろづのことにてをえみ給ひとの、さま〴〵にかきたまへるかな。一日、たはぶれに物をしみ(せしをカ)、宮のとしごろめしつるも、けふこそはたてまつるなれ。この返事はわれせん。つかひはたれぞ」ととはせ給へば、「たてまつりをきてまかりにけり」ときこゆれば、「いとこゝちなきところの人かな。かれよりかゝるものあらんつかひやり(やる、心せよカ)、心よ」

前田家本宇津保物語六、藏開の下、國譲の上　昭和三十三年

古典文庫　第一三五冊